

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02629

研究課題名(和文) 多面的対人葛藤場面における道徳的洞察の発達

研究課題名(英文) Development of moral insight in multi-faced conflict situations

研究代表者

首藤 敏元 (SHUTO, Toshimoto)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：30187504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,260,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多面的対人葛藤場面から道徳的逸脱の要素を見抜き、判断と行動につながる社会的認知のプロセスを道徳的洞察と定義した。そして、道徳的洞察には道徳的概念の活性化と不活性化の両方の社会的認知プロセスが関係すると仮定し、それらの社会的認知の発達の特徴について、幼児から成人までを対象にした15種類の調査を実施した。結果の総合的な考察により、道徳的洞察という社会的認知のプロセスは道徳的概念自体とともに発達し、パターン化されることで人格的要因として変容していくといったモデルを作成し、今後の道徳発達と教育に関する心理学的な研究課題を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は道徳的概念の活性化をもたらす要因が他者の感情への焦点づけであり、その初期発達には大人の共感的コミュニケーションを活かした関わり方が関係することを示した。また、青年期以降の道徳的不活性化には3つの側面があり、道徳的に歪んだ「正当化」が歪んだパーソナリティと関連すること、歪んだ「正当化」は対人援助の経験とその内省により変容することを示した。これらの成果は、道徳発達のプラスの側面をより明確に説明できるようになっただけでなく、攻撃行動とその傍観、さらには反道徳的なパーソナリティをも説明可能になることを示唆する。道徳発達に関する教育心理学研究と教育実践にとって有意義な示唆をもたらしたといえる。

研究成果の概要(英文)：Fifteen types of studies were conducted to consider social cognitive processes of moral engagement and disengagement. The results indicated that the three types of cognitive distortions were related to moral disengagement in high school students and older participants. Moral concepts' distortion was mainly related to immoral personality and uncooperative interpersonal relationships. Moral disengagement was transformable in university students through systematic interpersonal support activities. In elementary school students, a high interest in others' feelings could affect moral engagement, whereas obedience to adults' authority might lead to moral disengagement. Five-year-old children could make moral judgments based on the intentions of behaviors, which did not always need the Theory of Mind acquisition. Based on the above results, we developed a model in which moral insight develops along with moral concepts and transforms into personality factors by developing a pattern.

研究分野：発達心理学

キーワード：道徳発達 対人葛藤 攻撃行動 道徳的不活性化 心の理論 社会的認知 共感

1. 研究開始当初の背景

他者から攻撃や挑発を受ける場面は対人関係の中で自己肯定感の揺らぐ葛藤場面の代表格である。攻撃行動には多くのタイプがあると同時に、その行為の文脈によっては攻撃行動に付随する道徳的逸脱の要素が曖昧化される。例えば、いじめには他者を心理身体的に傷つけるという道徳的逸脱の要素が付随するが、それを「ふり遊び」の文脈で行うことにより、仲間遊びに見せかけることもできる。その結果、他者による道徳的逸脱の認知は曖昧になり、「いじめは暴力である」という判断も揺らぐことになる。また「学級会での反対意見の表明」は正当な自己主張としても関係性攻撃としても実施されうる。これらの攻撃行動は直接的に暴力と認知されるのではなく、社会的文脈に応じた認知的調整の結果として解釈、判断される。本研究は、社会的文脈の影響を受け、人によって解釈と判断の異なる葛藤場面を多面的対人葛藤場面と呼ぶ。多面的対人葛藤場面での道徳的判断の曖昧化に関わる研究は、Turiel らによる社会的領域理論では領域調整として、Bandura の社会的認知理論では道徳的不活性化として研究されてきた。

2. 研究の目的

道徳性の発達理論は、多様性のある社会での向社会的行動と協調性だけでなく、非人道的行動の生起過程を説明できる必要がある。近年、暴力行為やネットいじめの生起過程において、道徳的概念の働きを停止させる認知の歪みに焦点を当てた研究が進められるようになった。この道徳的不活性化の影響と変容に関する研究は欧米社会を中心に行われているものの、わが国ではまだ始まったばかりである。さらに社会的領域理論と社会的認知理論という異なる理論的枠組での研究が独自に展開しており、両者の関連については未検討のままである。本研究は、道徳的活性化と不活性化について領域調整と道徳的不活性化の両方の観点からアプローチし、その社会的認知の発達と関連要因を検討することにより、多面的対人葛藤場面での道徳的洞察を理論化する。

3. 研究の方法

以下の4種類の研究と合計12種類の調査研究が実施された。

研究1 道徳的洞察の初期発達、および適応との関連

- 調査1-幼児期の「心の理論」と道徳的判断
- 調査2-幼児児童の他者の感情への焦点づけと道徳的自律
- 調査3-道徳的判断の歪み(領域調整不全)と心理的適応

研究2 道徳的判断の歪みをもたらす文化的要因

- 調査4-道徳的判断の歪み(領域調整不全)と俗信的しつけ言葉(大学生)
- 調査5-道徳的判断の歪み(領域調整不全)と俗信的しつけ言葉(養育者)
- 調査6-道徳的判断の歪み(領域調整不全)をもたらす文化的要因

研究3 若者の道徳的不活性化の特徴と変容

- 調査6-若者を対象にした道徳的不活性化尺度の開発(多面的協調性を含む)
- 調査7-大学生における道徳的不活性化の変容(実習の効果)

研究4 道徳的活性化と不活性化に影響する養育要因

- 調査8-幼児を育てる親の道徳的領域調整
- 調査9-幼児児童を育てる親の共感的コミュニケーションと子どもの発達
- 調査10-幼児の反抗に対する母親の感情と関わり方、および子どもの社会的発達(質問紙調査)
- 調査11-幼児の反抗に対する母親の感情と関わり方(縦断的振り返り記録)
- 調査12-保育所での集団保育と幼児の道徳性のめばえ(観察)

4. 研究成果

(1) 研究1

5歳から8歳の子どもは単独行動をとる慣習違反よりも人に迷惑をかける慣習違反をより悪いと判断し、その理由として慣習要素だけでなく道徳的及び自己管理的要素にも言及することがあり、この多面的判断の傾向に有意な年齢差は認められない(樟本・首藤・利根川, 2021a)。他者への危害に着目する道徳的洞察は4歳に発達し、誤信念理解とは独立して出現することが見出された(樟本・首藤・上岡・利根川, 2019)。さらに、誤信念理解は「ふり行為」の共有が曖昧な場面での「叩く」行為への悪

Table 1 2つの道徳的誤信念課題における他者理解とTOM誤信念理解との相関

| | ふり遊び場面での他者理解 | | | 片付け場面 他者理解 | TOM課題 |
|-------|--------------|--------|--------|---------------|--------|
| | 一致場面 | 曖昧場面 | 不一致場面 | | |
| 平均値 | 2.04 | 2.82 | 3.05 | 1.73 | 1.71 |
| SD | (1.37) | (1.22) | (1.10) | (1.07) | (1.06) |
| TOM課題 | .075 | .323* | .163 | .296* | |

年齢(月齢)と語彙得点を統制した相関係数

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

さ判断と有意に関連し、また誤信念理解の獲得は他者の悪意の推測を適切におこなう能力と関連しているものの、道徳的判断とは関係していないことが見出された(樟本・首藤・利根川, 2020)。道徳的

Table 2 道徳的判断関連得点を目的変数、領域調整を説明変数とする学年ごとの重回帰分析の結果

| | 性 | 領域調整 | | | | 重相関係数 | 分散分析 |
|-------------|------------|------|------|-------|--------|-------|----------|
| | | 自愛思慮 | 人間生活 | 他者感情 | | | |
| 行為の悪さ 判断 | 低学年(n=187) | .07 | -.01 | .10 | .11 | .209 | 2.07 |
| | 中学年(n=177) | -.04 | -.11 | .14 | .27* | .311 | 4.59** |
| | 高学年(n=169) | .02 | -.04 | .13 | .40*** | .485 | 12.60*** |
| 反抗重大視 判断 | 低学年(n=178) | -.04 | .12 | -.12 | .00 | .081 | 0.29 |
| | 中学年(n=165) | .18 | .26* | -.19 | .02 | .241 | 2.46* |
| | 高学年(n=156) | .11 | .26* | -.34* | .11 | .237 | 2.47* |
| 行為即中止 判断 | 低学年(n=187) | .04 | -.05 | .11 | .09 | .160 | 1.19 |
| | 中学年(n=177) | -.01 | -.07 | .07 | .33** | .352 | 6.06*** |
| | 高学年(n=169) | -.02 | .09 | .13 | .31** | .474 | 11.88*** |

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

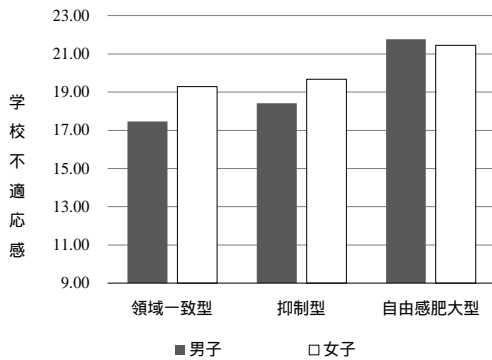


Figure 1 小学6年生における領域調整タイプと学校不適応感

(2) 研究2

道徳的不活性化をもたらす文化的要因として大人による「勉強」への過度の価値づけと「脅しのしつけ言葉」を取りあげた。幼児126名とその保護者を対象にした調査から、「勉強」に価値を置く家庭では、お手伝いの道徳的価値が曖昧化される可能性のあることが示唆された(首藤・利根川・樟本・上岡, 2018)。幼少期に俗信的しつけ言葉を多く受けた幼児の保護者は、現在の子育てにおいて統制的な養育期待度を示す傾向の強いことが分かった(Tonegawa, Ueoka, Kusumoto, & Shuto, 2019)。大学生380名を対象にした調査からは、道徳的、慣習的および自己管理上の違反に対して自己抑制的になる大学生(過剰抑制型)は相対的に俗信的しつけ言葉経験を強く持っていた(首藤・利根川・上岡・樟本, 2020)。

Table 3 Mean values of parenting styles, strictness of discipline, and immanent justice by internalized superstitious disciplinary word (ISDW) group

| three groups by 33 percentile | scores of ISDW | parent's age | parenting style | | strictness of discipline | | | immanent justice concept | |
|-------------------------------|----------------|--------------|-----------------|-------------|--------------------------|-------------|-----------|--------------------------|-----------|
| | | | accepting | restrictive | moral | conventiona | prosocial | | |
| | | | | | | | | | |
| low | <i>n</i> | 54 | 53 | 54 | 54 | 54 | 54 | 53 | 50 |
| | MEAN | 11.83 | 35.91 | 3.74 | 3.51 | 2.71 | 2.54 | 1.92 | 1.33 |
| | SD | 4.82 | 4.29 | 0.62 | 0.74 | 0.55 | 0.57 | 0.38 | 0.44 |
| medium | <i>n</i> | 61 | 57 | 59 | 61 | 58 | 60 | 60 | 54 |
| | MEAN | 26.85 | 37.79 | 3.65 | 3.73 | 2.82 | 2.52 | 1.96 | 1.31 |
| | SD | 6.13 | 4.87 | 0.56 | 0.61 | 0.53 | 0.46 | 0.37 | 0.41 |
| high | <i>n</i> | 61 | 59 | 61 | 61 | 60 | 57 | 61 | 60 |
| | MEAN | 59.49 | 38.02 | 3.73 | 3.95 | 2.90 | 2.74 | 2.06 | 1.64 |
| | SD | 15.56 | 4.82 | 0.65 | 0.56 | 0.49 | 0.50 | 0.51 | 0.73 |
| Total | <i>n</i> | 176 | 169 | 174 | 176 | 172 | 171 | 174 | 164 |
| | MEAN | 33.56 | 37.28 | 3.71 | 3.74 | 2.82 | 2.60 | 1.98 | 1.44 |
| | SD | 22.33 | 4.74 | 0.61 | 0.66 | 0.53 | 0.52 | 0.43 | 0.58 |
| <i>F</i> (2, 161-173) | | 332.73 | 3.36 | 0.36 | 6.91 | 1.89 | 3.16 | 1.62 | 6.40 |
| | | $p < .001$ | $p < .05$ | n.s. | $p < .001$ | n.s. | $p < .05$ | n.s. | $p < .01$ |

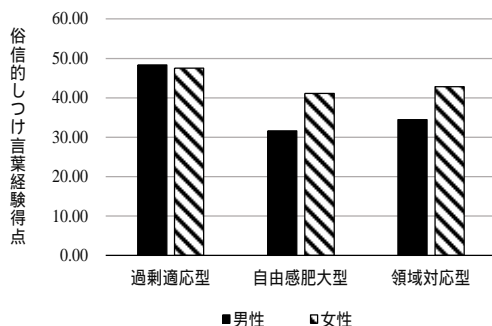


Figure 2 道徳的判断タイプと性別にみた俗信的しつけ言葉経験

洞察は「心の理論」の獲得とは独立して発達するものの、他者の意図を推測する必要のある場面での道徳的領域調整とは関連すると考えられる。

多義的・多面的な対人葛藤場面での児童の道徳的判断を領域調整と認知の歪みの観点から研究した。小学1年生から6年生までの児童340名を対象に調査した結果、他者の感情への関心が道徳的洞察をもたらし、逆に大人の権威への関心が認知の歪みをもたらしやすいことが示された(首藤・利根川・樟本・上岡, 2019)。

道徳的判断と健康との関係について前期(小学6年生276名)・中期(中学生246名と高校生357名)・後期の青年(大学生148名)を対象にした調査から、いずれの時期においても領域調整のタイプとして、領域合致型、過剰統制型、自由感肥大型の3つに分類できることが示された。そして、慣習と自己管理

場面で自由裁量判断を發揮する青年(自由感肥大型)は、前期・中期・後期に関係なく、精神的に不健康であることが示され、道徳的不活性化が健康と関連することが示唆された(Kusumoto, Ueoka, Tonegawa, & Shuto, 2018)。

(3) 研究3

16歳から22歳の若者1082名を対象に、道徳的場面での認知の歪みを測定する9項目3つの下位尺度(概念の歪み、解釈の歪み、評価の歪み)からなる尺度が開発された。因子構造の適合度、再テスト法による信頼性、3つの下位尺度の内的整合性も十分な値が得られた。3種類の歪み得点は男性の方が有意に高く、この性差は高校生と大学生で明確であることが分かった。また、ダークトライアド尺度、多面的協調性尺度(登張・首藤・大山・名尾, 2019)、公正世界観尺度、および批判的思考態度尺度との関連性を分析したところ、正当化の歪みが

非人道的で非協調的な人格特性と関連することが示された(首藤・利根川・樟本, 2021a)。

また、大学生の道徳的不活性化は教育・保育実習という計画的な対人援助の体験と、事後指導という複眼的な省察の機会をもつことで、1年後には有意に低下することも見出された(利根川・首藤・樟本, 2020)。

Table 4 道徳的認知の歪み尺度の平均値^{a)}と標準偏差、及びANOVAの結果

| | 正当化の歪み | | | 解釈の歪み | | | 評価の歪み | | |
|-------------|---|------|------|---|------|------|---|------|------|
| | N | Mean | SD | N | Mean | SD | N | Mean | SD |
| 高校生 | 100 | 2.29 | 1.11 | 100 | 2.73 | 1.09 | 100 | 2.52 | 0.92 |
| M age=16;10 | 100 | 1.77 | 0.78 | 100 | 2.43 | 0.98 | 100 | 2.37 | 0.87 |
| 大学生 | 188 | 2.05 | 1.02 | 189 | 2.86 | 1.04 | 188 | 2.92 | 0.99 |
| M age=19;6 | 219 | 1.53 | 0.58 | 219 | 2.27 | 0.82 | 219 | 2.42 | 0.90 |
| 社会人 | 100 | 2.17 | 1.11 | 100 | 2.37 | 1.04 | 100 | 2.39 | 1.07 |
| M age=22;0 | 100 | 2.03 | 0.92 | 100 | 2.29 | 1.01 | 100 | 2.46 | 1.08 |
| グループ(A) | F(2, 804)=9.61, 偏η ² =.02, p<.001 | | | F(2, 802)=4.67, 偏η ² =.01, p<.01 | | | F(2, 801)=6.00, 偏η ² =.02, p<.01 | | |
| 性(B) | F(1, 804)=34.37, 偏η ² =.04, p<.001 | | | F(1, 802)=19.75, 偏η ² =.02, p<.001 | | | F(1, 801)=7.40, 偏η ² =.01, p<.01 | | |
| A × B | F(2, 804)=3.37, 偏η ² =.01, p<.05 | | | F(2, 802)=4.80, 偏η ² =.01, p<.01 | | | F(2, 801)=6.03, 偏η ² =.02, p<.01 | | |

^{a)}1「まったく当てはまらない」～6「よく当てはまる」の6段階評定、得点が高いほど歪みも大きい。

(4) 研究4

幼児を育てる親(246名)は、さまざまな幼児の逸脱行動に対して、道徳、慣習、および個人の領域概念を認知的に調整して関わることを示された(首藤・利根川・樟本・上岡, 2020)。幼児児童は慣習場面での逸脱行為を慣習違反とするだけでなく、影響を受ける他者への気づかい(道徳領域)と自己の思慮不足(個人領域)の思考を働かせて判断していた。この多面的な社会的認知は養育者の共感的コミュニケーションの程度と有意に関連していた(首藤・利根川・樟本, 2021b)。

Table 5 養育者の子育てスタイル、共感的コミュニケーションと子どもの行動特性との相関

| 変数名 | 平均値 | 標準偏差 | 子育てスタイル | | 養育者の共感的コミュニケーション | | | 子どもの行動特性 | | | | |
|----------|------|------|---------|-------|------------------|-------|----------|----------|-------|------|------|--|
| | | | 応答性 | 統制性 | 思いやり | 診断と評価 | 自己管理のしつけ | 協同性 | 自己統制 | 自己主張 | 調和性 | |
| 応答性 | 3.94 | 0.88 | 1.00 | | | | | | | | | |
| 統制性 | 3.48 | 0.82 | .46** | 1.00 | | | | | | | | |
| 思いやり | 2.74 | 0.60 | .42** | .22** | 1.00 | | | | | | | |
| 診断と評価 | 2.40 | 0.65 | .07 | .23** | .28** | 1.00 | | | | | | |
| 自己管理のしつけ | 1.91 | 0.68 | -.12 | .05 | .07 | .50** | 1.00 | | | | | |
| 協同性 | 3.67 | 0.81 | .40** | .17* | .28** | .06 | -.29** | 1.00 | | | | |
| 自己統制 | 3.44 | 0.75 | .37** | -.03 | .22** | -.04 | -.22** | .57** | 1.00 | | | |
| 自己主張 | 3.25 | 0.71 | .21** | .10 | .28** | .00 | -.01 | .25** | .25** | 1.00 | | |
| 調和性 | 3.07 | 0.81 | .11 | .09 | .16* | .20** | .08 | .39** | .34** | .03 | 1.00 | |

n=182

*p<.05 **p<.01

親、子どもの性、および子どもの年齢を統制した相関係数

12名の母親による子どもの反抗反発と親の関わり方に関する5ヶ月間の振り返り記録を分析した結果、俗信的しつけ言葉のような子どもの不安をあおる働きかけは一定数出現し、この種の親のネガティブ感情と統制的な関わり方は、子どもの反抗反発を持続させ、親のストレスを高めることが示された(上岡・利根川・首藤, 2019)。さらに、346名の幼児の保護者を対象にした調査から、幼児の反抗反発に対する親のネガティブ感情は幼児の神経質さや感情調整不全をもたらす要因になることが示された。道徳的不活性化をもたらす認知の歪みは、ストレスの高い親の統制的なしつけから形成されるかもしれないと考察された(Ueoka, Kusumoto, Tonegawa, & Shuto, 2020)。

保育所の保育士は幼児に他者の気持ちや状況、それに伴う幼児自身の気持ちに焦点を当てて繰り返し語りかけることが多く、幼児自身も年長の後半になると他者の気持ちや要求を推測できるようになることが観察された。認知発達と協同的な体験を積み重ねた幼児は、大人による他者の感情への誘導的な語りかけを「足場」として、道徳的概念の中核的な関心を発達させると考えられる(樟本・首藤・利根川, 2021b)。

(5) モデルの作成

4年間の研究成果に基づき、道徳的洞察という社会的認知のプロセスは、幼児期から「心の理論」という認知発達と道徳的領域概念の発達との相互作用により形成され、文化的および養育上の調整要因による影響を受け、活性化と不活性化のパターンに個人差が生じ、それが固定化されることにより人格的要因として変容していくといったモデルが作成され、今後の道徳発達と教育に関する心理学的な研究課題が提示された。

<引用文献>

- Kusumoto, C., Ueoka, K., Tonegawa, T., & Shuto, T. 2018 Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 25 巻 1 号, 49-64.
- 樟本千里・首藤敏元・上岡紀美・利根川智子 2020 ごっこ遊びの意図の共有の有無と叩く「ふり行為」への道徳的判断 日本発達心理学会第 31 回大会(大阪), 440.
- 樟本千里・首藤敏元・利根川智子 2020 幼児の道徳的判断と「心の理論」との関連 日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集, 41.
- 樟本千里・首藤敏元・利根川智子 2021a 集団規範の違反に対する幼年期の子どもの道徳的判断 日本発達心理学会第 32 回大会発表論文集, 210.
- 樟本千里・首藤敏元・利根川智子 2021b 幼児の他者への気づきを促す援助のあり方～5 歳児クラスの活動の振り返りに着目して～ 日本保育学会第 74 回大会発表論文集、印刷中
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 2018 お手伝いに関する親子の価値判断 日本保育学会第 71 回大会（宮城学院女子大学）P-B-11-2, p.835.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 2019 小学生における対人的攻撃行動場面での社会道徳的領域調整の発達 埼玉大学紀要教育学部, 68(2), 21-31.
- 首藤敏元・利根川智子・上岡紀美・樟本千里 2020 大学生における幼少期に受けた俗信的しつけの経験と現在の道徳的判断タイプとの関連 埼玉大学紀要教育学部, 69(2), 135-142.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 2020 幼児の社会道徳的逸脱行為に対する親の領域調整と関わり方 埼玉大学紀要教育学部, 69(1), 99-108.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里 2021 日本の若者の道徳的認知の歪み～道徳的不活性化尺度の開発～ 埼玉大学紀要教育学部, 70(2), 印刷中
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里 2021 幼年期の子どもを育てる養育者の共感的コミュニケーション 日本保育学会第 74 回大会発表論文集、印刷中
- 登張真稲・首藤敏元・大山智子・名尾典子 2019 3 因子で捉える多面的協調性尺度の作成 心理学研究, 90(2), 167-177.
- Tonegawa, T., Ueoka, K., Kusumoto, C., & Shuto, T. 2019 Effects of Childhood Experiences of Discipline Using Superstitious Sayings on Current Parenting Attitudes in Parents of Young Children. Bulletin of Tohoku Fukushi University, 44, pp. 145-158.
- 利根川智子・首藤敏元・樟本千里 2020 保育実習前後における学生の保育省察力と批判的思考, 道徳的不活性化の変容 日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集, 63.
- 上岡紀美・利根川智子・首藤敏元 2019 期待や規範から外れた幼児の行動場面での親の感情と関わり方 日本保育学会第 72 回大会発表論文集, 581.
- Ueoka, K., Kusumoto, C., Tonegawa, T., & Shuto, T. 2020 Effects of parents' feelings and methods of managing child rebellion on children's self regulation traits. Bulletin of Sendai Shirayuri Women's College, vol.24, pp.13-27.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 18件）

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Tobari Maine, Shuto Toshimoto, Oyama Tomoko, Nao Fumiko | 4. 巻 90 |
| 2. 論文標題 Development of a Multifaceted Cooperativeness Scale based on a three-factor solution | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology | 6. 最初と最後の頁 167 ~ 177 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.90.17242 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 | 4. 巻 68(2) |
| 2. 論文標題 小学生における対人的攻撃行動場面での社会道徳的領域調整の発達 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 埼玉大学紀要教育学部(教育科学) | 6. 最初と最後の頁 21-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Tonegawa Tomoko, Ueoka Kimi, Kusumoto Chisato, Shuto Toshimoto | 4. 巻 44 |
| 2. 論文標題 Effects of Childhood Experiences of Discipline Using Superstitious Sayings on Current Parenting Attitudes in Parents of Young Children | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Bulletin of Tohoku Fukushi University | 6. 最初と最後の頁 145-158 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Ueoka Kimi, Kusumoto Chisato, Tonegawa Tomoko, & Shuto Toshimoto | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 Effects of parents' feelings and methods of managing child rebellion on children's self regulation traits | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Bulletin of Sendai Shirayuri Women's College | 6. 最初と最後の頁 13-27 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 | 4. 巻 69(1) |
| 2. 論文標題 幼児の社会道徳的逸脱行為に対する親の領域調整と関わり方 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 埼玉大学紀要教育学部(教育科学), | 6. 最初と最後の頁 99-108 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 利根川智子・音山若穂・三浦主博・和田明人・上村裕樹・織田栄子 | 4. 巻 43 |
| 2. 論文標題 対話的アプローチが実習事後指導における協同性に及ぼす影響についての一検討 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 東北福祉大学研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 35-50 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 上岡紀美 | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 乳幼児期の非認知能力を育む関わりに関する研究 保育者の言葉かけを中心として | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 家庭教育研究 | 6. 最初と最後の頁 25-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Toshimoto Shuto, Katsumi Ninomiya, & Kanako Sugiyama | 4. 巻 67(2) |
| 2. 論文標題 Japanese Adults' Personal-Moral Judgments on Self-Priority/Sacrifice Solutions for Family Conflicts. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Saitama University. Faculty of Education | 6. 最初と最後の頁 109-124 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Chisato Kusumoto, Kimi Ueoka, Tomoko Tonegawa, & Toshimoto Shuto | 4. 巻 25(1) |
| 2. 論文標題 Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 岡山県立大学保健福祉学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 49-64 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15009/00002272 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 首藤敏元・近藤茜・伊多波美奈 | 4. 巻 67(1) |
| 2. 論文標題 アジアの日本語幼稚園に通う幼児の異文化体験と異文化適応 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 埼玉大学紀要教育学部 | 6. 最初と最後の頁 11-27 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Choe, S. J., Xu, Y., & Shuto, T. | 4. 巻 66(2) |
| 2. 論文標題 Beliefs of east asian adolescents regarding maternal love and moral autonomy | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 埼玉大学紀要教育学部 | 6. 最初と最後の頁 185-193 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 首藤敏元・利根川智子・上岡紀美・樟本千里 | 4. 巻 69(2) |
| 2. 論文標題 大学生における幼少期に受けた俗信的しつけの経験と現在の道徳的判断タイプとの関連 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 埼玉大学紀要教育学部 | 6. 最初と最後の頁 135-142 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24561/00019063 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 上岡紀美・利根川智子・首藤敏元 |
| 2. 発表標題 期待や規範から外れた幼児の行動場面での親の感情とかわり方 |
| 3. 学会等名 日本保育学会第72回大会論文集, p.581 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Tonegawa Tomoko, Ueoka Kimi, Kusumoto Chisato and Shuto Toshimoto |
| 2. 発表標題 Effects of Childhood Experiences of Discipline Using Superstitious Sayings on Current Parenting Attitudes in Parents of Young Children, |
| 3. 学会等名 The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference(Taipei), p.503 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Ueoka Kimi, Kusumoto Chisato, Tonegawa Tomoko, & Shuto Toshimoto |
| 2. 発表標題 2019 Effects of parents' feelings and methods of managing child rebellion on children's self-regulation traits. |
| 3. 学会等名 The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (Taipei), pp.488-489. (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Ida Megumi, & Shuto Toshimoto |
| 2. 発表標題 Types of utterances in the development of pretend play. |
| 3. 学会等名 The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (Taipei), pp.486-487. (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 利根川智子・織田栄子 |
| 2. 発表標題 対話型アプローチを用いた保育実習振り返りの授業実践 学生の学びと実践における課題 |
| 3. 学会等名 第4回日本保育者養成教育学会研究大会(福山市立大学) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 樟本千里・首藤敏元・上岡紀美・利根川智子 |
| 2. 発表標題 ごっこ遊びの意図の共有の有無と叩く「ふり行為」への道徳的判断 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会(大阪), 440. |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 利根川智子・樟本千里・上岡紀美・首藤敏元 |
| 2. 発表標題 幼児の環境逸脱行為に対する親のかかわり方 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会発表, PS9-13, p.586. |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 小学校6年生における道徳的判断タイプと適応との関連 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会東北大学川内北キャンパス), P3-49, p.307. |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 お手伝いに関する親子の価値判断 |
| 3. 学会等名 日本保育学会第71回大会（宮城学院女子大学），P-B-11-2, p.835. |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 大学生における迷信的しつけの経験と道徳的判断タイプとの関連 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第82回大会発表論文（東北大学・仙台国際会議場），2PM-093. |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Chisato Kusumoto, Kimi Ueoka, Tomoko Tonegawa, & Toshimoto Shuto |
| 2. 発表標題 Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. |
| 3. 学会等名 The 126th Annual convention of American Psychology Association, (Moscone Center, San Francisco, CA.), #1054. (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 小学生の道徳的判断における社会道徳的領域調整の発達 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第81回大会発表論文集, p.832. |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 幼児の社会道徳的逸脱場面における親の領域調整と関わり方 |
| 3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, p.190. |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美 |
| 2. 発表標題 小学6年生における道徳的判断タイプと適応との関連 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会発表論文集, p.307. |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 利根川智子・上岡紀美・樟本千里 |
| 2. 発表標題 保育者志望学生の批判的思考と道徳的な認知のゆがみ |
| 3. 学会等名 日本保育学会第73回発表論文集, p.1003-1004. |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 樟本千里・首藤敏元・上岡紀美・利根川智子 |
| 2. 発表標題 他者の隠された悪意に対する幼児の道徳的判断 |
| 3. 学会等名 日本保育学会第73回発表論文集, p.1149-1150. |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 樟本千里・首藤敏元・利根川智子 |
| 2. 発表標題 幼児の道徳的判断と「心の理論」との関連 |
| 3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集, p.41. |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 利根川智子・首藤敏元・樟本千里 |
| 2. 発表標題 保育実習前後における学生の保育省察力と批判的思考, 道徳的不活性化の変容 |
| 3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集, p.63. |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 樟本千里・首藤敏元・利根川智子 |
| 2. 発表標題 集団規範の違反に対する幼年期の子どもの道徳的判断 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会発表論文集, p.210. |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|--|----|
| 研究 分担者 | 利根川 智子 (Tonegawa Tomoko) (40352546) | 東北福祉大学・教育学部・准教授 (31304) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 樟本 千里 (Kusumoto Chisato) (10413519) | 岡山県立大学・保健福祉学部・講師 (25301) | |
| 研究分担者 | 上岡 紀美 (Ueoka Kimi) (00582529) | 仙台白百合女子大学・人間学部・准教授 (31309) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |